

笥の話

梶井基次郎

青空文庫

私は散歩に出るのに二つの路を持つていた。一つは溪たにに沿つた街道で、もう一つは街道の傍から溪に懸つた吊橋つりばしを渡つて入つてゆく山径だつた。街道は展望を持つていたがそんな道の性質として気が散り易かつた。それに比べて山径の方は陰気ではあつたが心を静かにした。どちらへ出るかはその日その日の気持が決め

た。
しかし、いま私の話は静かな山径の方をえらばなければならぬ。

吊橋を渡つたところから径は杉林のなかへ入つてゆく。杉こずえの梢が日さえぎを遮り、この径にはいつも冷たい湿つぽさがあつた。ゴチツ

ク建築のなかを辿^{たど}つてゆくときのような、犇^{ひし}ひしと迫つて来る静寂と孤独とが感じられた。私の眼はひとりでに下へ落ちた。径の傍らには種々の実^み生^{しょう}や蘚^{せん}苔^{たい}、羊齒^{しだ}の類がはえていた。この径ではそういった矮^{わい}小^{しょう}な自然がなんとなく親しく——彼らが陰湿な会話をはじめるお伽^{とぎ}噺^{ばなし}のなかでのように、眺められた。また径の縁には赤土の露出が雨滴にたたかれて、ちようど風化作用に骨立った岩石そつくりの恰好になつていところがあつた。その削り立った峰^{いた}の頂^{いただき}にはみな一つ宛小石が載つかつていた。ここへは、しかし、日がまつたく射して来ないのではなかつた。梢の隙間を洩れて来る日光が、径のそここや杉の幹へ、蠟燭^{ろうそく}で照らしたような弱い日なたを作っていた。歩いてゆく私の頭の影

や肩先の影がそんななかへ現われては消えた。なかには「まさかこれまでが」と思うほど淡いのが草の葉などに染まっていた。試しに杖をあげて見るとささくれまでがはつきりと写った。

この径を知ってから間もなくの頃、ある期待のために心を緊張させながら、私はこの静けさのなかをことにしばしば歩いた。私が目ざしてゆくのは杉林の間からいつも氷室ひむろから来るような冷気が径へ通っているところだった。一本の古びた笥かげひがその奥の小暗いなかからおりて来ていた。耳を澄まして聴くと、幽かすかなせせらぎの音がそのなかにきこえた。私の期待はその水音だった。

どうしたわけで私の心がそんなものに惹ひきつけられるのか。心がわけても静かだったある日、それを聞き澄ましていた私の耳が

ふとそのなかに不思議な魅惑がこもっているのを知ったのである。その後追いおいに気づいていったことなのであるが、この美しい水音を聴いていると、その辺りの風景のなかに変な錯誤が感じられて来るのであった。香もなく花も貧しいのぎ蘭らんがそのところどころに生えているばかりで、杉の根方はどこも暗く湿っぽかった。そして笈といえはやはりあたりと一帯の古び朽ちたものをその間に横たえているに過ぎないのだった。「そのなかからだ」と私の理性が信じていても、澄み透とおった水音にしばらく耳を傾けていると、聴覚と視覚との統一はすぐばらばらになってしまつて、変な錯誤の感じとともに、訝いぶかしい魅惑が私の心を充たして来るのだつた。

私はそれによく似た感情を、露草の青い花を眼にするととき経験することがある。草叢くさむらの緑とまぎれやすいその青は不思議な感わしを持つている。私はそれを、露草の花が青空や海と共通の色を持つているところから起る一種の錯覚だと快く信じているのであるが、見えない水音の醸かもし出す魅惑はそれにどこか似通つていた。

すばしこく枝移りする小鳥のような不定さは私をいらだたせた。蜃気楼しんきろうのようなはかなさは私を切なくした。そして深祕はだんだん深まってゆくのだった。私に課せられている暗鬱な周囲のなかで、やがてそれは幻聴のように鳴りはじめた。束つかの間の閃光せんこうが私の生命を輝かす。そのたび私はあつあつと思つた。それは、

しかし、無限の生命に眩惑げんわくされるためではなかった。私は深い絶望をまのあたりに見なければならなかったのである。何という錯誤だろう！ 私は物体が二つに見える酔っ払いのように、同じ現実から二つの表象を見なければならなかったのだ。しかもその一方は理想の光に輝かされ、もう一方は暗黒の絶望を背負っていた。そしてそれらは私がつきりと見ようとする途端一つに重なって、またもとの退屈な現実に戻ってしまうのだった。

算かけひは雨がしばらく降らないと水が涸かれてしまう。また私の耳も日によつてはまるつきり無感覚のことがあつた。そして花の盛りが過ぎてゆくのも同じように、いつの頃からか算にはその深秘がなくなつてしまい、私ももうその傍たたずに佇むことをしなくなつた。

しかし私はこの山径を散歩しそこを通りかかるたびに自分の宿命について次のようなことを考えないではいられなかった。

「課せられているのは永遠の退屈だ。生の幻影は絶望と重なっている」

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「近代風景」

1928（昭和3）年4月号

※表題は底本では、「筧《かけひ》の話」となっています。

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiya

校正：福地博文

1998年11月27日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

筧の話

梶井基次郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>